

富士紀行（9） 須走の名所旧跡等（2）

（問い） 富士山に登山する人は年間何人ぐらいか？

5口合わせると約30万人である。富士吉田口（河口湖口含む）が、最も多く全登山者の半分強である。ついで、須走口が約8万人で、27%を占め、富士宮口が次ぐ。御殿場口は3000弱である。御殿場口は火山灰地を登る健脚向きの登山道であるので、登山者が少ないのだろう。

須走の名所旧跡等についての第二弾である。裾野市の教育長のお話や東海道400年祭のイベントの実施計画書等から隠れた名所等を紹介する。

● 幻の滝

須走登山道5合目駐車場から山頂に向かって左方向へ約1km徒歩約30分の行程で、幻の滝がある。誰が名付けたか言い得て妙である。5月下旬から6月中旬にかけての富士山融雪期に、山頂成就岳（3,733m）から一気に流れ出る融水が見事な滝を形成する。その期間は一時であるため幻の滝と呼ばれる。雪が消え、水が涸れるとその岩場の変化に富んだ美しさを堪能出来るそうである。幻の滝に向かう途中にも所々に融水による小さな滝などが現れる。豊かな富士の恵みの水である。小川になり或いは伏流水になるのだろうか。

● 和製グランドキャニオン

小富士直下に、融雪によって刻まれた深い断崖を見ることが出来る。高さには優に80m程の高さの部分もあり、その距離も700～800mと言う壮大な断層を形作っている。その見事さとスケールの大きさから、「和製グランドキャニオン」と呼ばれ、密かなブームになっている。火山灰の断層は、富士山の嘗ての噴火の凄まじさを物語っている。時にニホンカモシカを見かけることが出来、「カモシカウォッチング」の名所としても知る人ぞ知るという。児童生徒に断層の教育をするには格好の場所でもある。

● カリヤス草原

カリヤスとは「イネ科ススキ属の多年草で、刈安の名は“刈りやすい草”の意味と解されている。山林中の草地に群生することが多い。茎は株立ちとなり、高さは1mに達する。葉は茎の節につき、幅広い線形で、長さは30cm余り、幅は1～1.5cmあり、まばらに粗い毛がある。9～10月ころ、長さ15cmくらいの花序を出す。ススキ属ではあるが、カリヤスの花序では細い総（ふさ）が数個掌状につき、毛におおわれない。小穂はやや密生して、長さは5mm強、芒（のぎ）はなく、対をなして、一方には短い柄が、他方には長い柄がある。小穂の付け根に短い基毛がある。かつて黄色染料として用いられ、アイとの交染で緑色も出していた。全草を乾燥し、熱湯で煮出して染色し、黄色のほかに、灰汁と石灰で茶緑色、鉄媒染で黒褐色に染色できた。」である。

幻の滝から約1kmカリヤス草原も見所である。ラン科テガタチドリと言う可愛いピンクの花が心を和ませてくれる。

● 溶岩橋

地元の住民でも知る人はまれと言うマニアの間で名所として知られているところで

ある。5合目駐車場の近くにある。

- 隠れた撮影スポット

富士山を撮影するスポットは色々あるそうであるが、須走にも一カ所あるそうだ。下原官舎がそうである。太陽が年に2回一週間に亘って頂上に沈むのだそうである。

- 鎌倉往還（中世の古道：全国に多くある。）

甲州街道と東海道の脇往還として、甲斐国府から御坂峠、富士北麓を籠坂越えで東海道沼津宿に通じている。

須走周辺で具体的にどこが鎌倉往還なのか小生は承知していないが、失われた古道を発見する旅も有益であろう。